

韓国人の靈魂観と悪霊のゆくえ

0 はじめに

少し前までの韓国の人々は、死者とともに生きていた。四代前までの親族の祭祀を少なくとも年に八回行い、さらに陰暦の十月または三月の頃には、時祭といって五代以上まえの墓をまわり、祀りを行う。三十代以上まえのご先祖様までであるのが一般だから、山のようなご馳走を抱えての墓参りは、いくら車の発達しても一仕事ではすまされまい。誰もが、よい家筋の末裔であることを望み、優れたご先祖様をいただき、代々の族譜に名を連ねることで社会的な地位を保ち、安心立命してきたのだから大変である。

私たち日本人の多くが、三代前のご先祖様の名前も知らず、その生涯にもまったく無関心なのとは大違いで、韓国では十代、二十代、三十代前の祖先の業績が、子孫の社会的地位を左右しかねなかった。彼らは、ご先祖様をたいせつに祀り、ご先祖様に守られて生きてきたのである。



山の墓に女たちが食事を運び、祭祀の準備をする。

しかし死者は、生きている人間と同じように、気まぐれであり、子孫が祭祀をきちんと行わなければ、すぐに祟って不幸をまきちらす。そして、連綿とつらなる祖霊のなかには、不本意な生涯をおくり、恨みを残したものも多い。

こうした死者の恨みや不満を晴らすためには、シャーマンの儀礼が行われる。シャーマンは、盛大な祀りを行い、歌い、舞って死者をなぐさめ、神がかりして無念の声を聞き、恨み（ハン）を一つひとつ解きほぐし、あの世へ無事に送りとどける。

私はここで、説話や口承によって伝えられてきた伝承を紹介することによって、韓国の人たちにとって、祖霊とはなにか、悪霊とはなにかを考えてみたいと思う。

1 墓と先祖供養

まず墓について。

韓国の人たちは、風水を大切にしてきた。風水から見て、村や家がよい土地にあれば、一族は栄える。だから家を建てる時には、人一倍気をつかう。しかし、彼らが一番気を使うのは自分の家ではなく、死者の棲家である墓の位置なのだ。ご先祖様は、風水がよく、日当たりも水はけもよい土地に鎮まっていれば、機嫌がよく、子孫を守ってくれる。風水のよい墓所は「明堂」とよばれ、さがしもとめられる。

よく知られた昔話に「虎の報恩」がある。

「むかし、若者が山に木をきりにいって、虎にあった。



女達によって準備された供養の食

若者が驚いて後ずさると、虎は大きな口をあけて、近寄ってくるが、襲う気配はない。若者が、思い切って近寄ってみると、虎ののどには大きな骨がささっていた。若者は、虎の口に手を入れて、骨をとりのぞいてやった。虎は、よろこんで、若者の着物をくわえて山奥に案内し、よい墓の位置を教えてくれた。若者が、そこに祖先の墓を移すと、家が栄え、若者の子孫から有名な将軍が誕生したという。」(崔仁鶴編著『韓国の昔話』三弥井書店 1975年参照)

実在の名家にもこんな話もある。

「むかし蔚山・金氏の祖先は貧しくて、ある家に奉公人として雇われていた。あるとき不幸があり、喪主となった主人が、風水師をやとって墓所をさがした。しかし探し当てた場所が気に入らず、風水師を邪険に追い払った。それを見た、金氏の祖先は、風水師に食べ物と宿を与え、墓所を譲ってくれるように頼んだ。風水師は、その場所が奉公人には過ぎた明堂



だと考えたが、親切にうたれて、譲ってやった。そして、婿入りの話が近々にあるが、断るなと忠告した。金氏の祖先は、風水師の教えたとおりに祖先を手厚く移葬し、長者の家の婿となり、蔚山・金氏という立派な両班の祖となった」(崔仁鶴・前掲書参照)

墓に酒を献ずる家長

しかし、死者は、いかに高潔で、手厚く葬られていても、時として怒りを発する。

村山智順は『朝鮮の鬼神』のなかで、三国統一の英雄である金庾信の魂魄が、三十六代惠恭王の時に、生前使えた武烈王の墓に現れて護国の勤めを辞退したという話を紹介している。原話は『東京雑記』収められている。

「庾信は死後も、護国の勤めをはたしていた。ところが惠恭王の時代になって、庾信の子孫が罪なく誅される事態が発生した。怒った庾信は生前に使えた武烈王の墓に赴き護国の勤めを辞退したいと訴えたが、墓の武烈王はそれを許さなかった。この噂を伝え聞いた惠恭王は、大いに恐れ、ただちに子孫の金敬信をつかわして、庾信に自らの過ちを詫び、庾信のために鷲仙寺に田を寄進して、その加護を願ったという。」(村山智順著『朝鮮の鬼神』朝鮮総督府 1929年参照)



祀る者のいない<雑鬼>のために用意された食事

庾信のように祖国に忠実な名将であっても、子孫が理不尽なあつかいを受ければ、黙っていない。その魂魄は、死して国を守る気迫に満ちているが、もしこれが怒りを発すれば、国を滅ぼしかねないのである。

村山はまた『慵斎叢話』のこんな話を紹介している。

「むかし権某という大臣がいた。李某という風水師に依頼して、父のためにより墓所をもとめたが、えられない。そこで風水のよいという他人の墓を奪うこととした。墓の持主は抗議したが、権は聞こうとせず、墓をあばき、強引に父を葬った。その夜、李の夢に紫髯の大夫が現れて『おまえが風水によって私の墓を明堂としたから、こういうことになったのだ』といって胸を打った。李は、胸のいたみに耐えず、血を吐いて死んだ。そして大臣・権某も、間もなく罪をえて、一家は絶えたという。」(村山智順・前掲書参照)

死者の怒りは、生前以上に激しい。彼らは、生前と同じか、それ以上の生活水準を要求する。だから、子孫は、季節ごとに祀りを行い、墓を清潔にたもち、十分な供物をそなえる。祀りを受けた死者は、世代を重ねるごとに、清らかに鎮まり、重みをもって子孫の安寧を保障する。しかし数多い祖霊の中には、さまざまの事情で、十分な祀りを受けることのできない者もいる。

2 死者のたたり

村山の紹介する同じ『慵斎叢話』に、こんな話がある。

「奇裕という人の祖父は名宰相であったが、祖父が死んでから、家に怪しいことが続いた。ある日、この家の子が遊んでいると、なにか重たいものが背にとりついた。その姿は誰にも見えないが、子供はびっしょり汗をかいている。また、飯をたくと、いつのまにか飯があちこちに撒き散らされている。ある時は、盆や机が空中にまいあがり、大釜の環が天井におどり上がって鳴り響く。火のないはずの竈から火が燃え上がるので消すと、その火があちこちに飛び火する。あまり異変がつづくので、家人は恐ろしく思って転居した。成人した奇裕は、祖先の家を空き家にしてはすまないと考えて、意を決してその家に住むこととした。しかしなおも怪事はつづき、裕が激怒して妖鬼を叱責すると、空中から『君もまた、楯つく気か』という声がした。裕は、間もなく病をえて死んだ。これは、裕の従弟の柳継亮というものが、かつて乱をおこし誅せられ、怨鬼となって裕の家に祟りをなしたものだという。」(村山智順・前掲書参照)

従弟の柳継亮が、なぜ奇裕の家にとりついたかは定かではない。しかし、柳継亮が乱を起こしたのであれば、おそらくその一族は絶え、祭祀をする者もなかったのであろう。柳継亮の霊は、位の高い奇裕の家をたよったが、相手にされず、祟ったのかもしれない。

同じく『慵斎叢話』に、一族に頼る死霊の話があるという。

「むかし李斯文という人が官職につくと、李の家に鬼物があらわれた。その声を聞くと十年前に死んだ叔姑に間違いない。生きているときと同じように家の仕事に口を出し、食事を要求し、気に入らないと当り散らす。食事をするときには、匙をとるのは見えないが、いつのまにかご飯もおかずもなくなっている。その姿は、腰から上は見えないが、腰から下は紙張りのチマをつけて、足は漆のように黒くて骨ばかりである。どうしてかと尋ねると、死んでから久しく地下にいたからだという。李斯文は、うるさいので、なんとか追い払おうとしたが、かえって自分が病気になって死んでしまった。」(村山智順・前掲書参照)

この叔姑の場合も、子孫が十分に供養をしていれば、このようなまねはしなかったに違いない。しかし、その供養が足りないので、出世した李斯文の家に現れたものと思われる。長く続いた朝鮮王朝の両班社会の論理では、一族から官僚をだすために、みな協力する

が、出世した者は一族に恩を返すのが当然である。この話に登場する李斯文の場合は、たいした出世ではないが、それでも叔姑の霊に住みつかれれば、世話をしないわけにはいかないのである。

恨みを残して死んだ者、死後に十分な供養を受けることのできなかつた者は、崇りをなす。このような恨みのうちでも、恋慕の思いを残して死んだ者の魂は、蛇鬼になってなおその思いをとげようとする。これもまた『慵斎叢話』の話である。

「むかし洪某という宰相が、まだ若かったとき、道でにわか雨に降られ、雨宿りをしようとして入った洞に庵があり、美しい尼僧がひとりいた。洪は、その尼と情を通じ、別れ際に何年何月には妻とするからと誓約して去った。尼僧は、その日を千秋の思いで待ち望んでいたが、洪はあらわれず、ついに病をえて死んでしまった。洪は、出世して南方の節度使となって赴任した。ある日、洪の敷物の上を小さな蜥蜴が歩いているので、これを捨てさせた。ところが翌日は一匹の小さな蛇が、洪の座に近づく。これを殺すと、翌日も現れて、少しずつ大きくなる。洪は、これが尼僧の霊であることに気づいて、殺させたが、そのたびに大きくなる。ついに洪は、万策尽きて、蛇を自分の古い禪につつんで箱に入れ身近に置くこととしたが、巡行のときも離すことができない。ついに洪の精神は衰えて、憔悴し、病をえて死んでしまった。」(村山智順・前掲書参照)

3 魂の通過儀礼

以上のように、説話や口伝の傳承をみていくと、およそ2つのことに気づくだろう。

ひとつは、死者と儀礼、とくに通過儀礼との関係である。私たちは、誕生から死にいたるまで、さまざまに立場を変える。幼児が子供になり、子供が少年・少女になり、少年・少女が青年・乙女となり、結婚して所帯をかまえ、子供をもち、一人前の大人となり、還暦をむかえて引退し、さらに幾つかの階梯をへて死者となる。その一つひとつの立場の変化にしたがって、七五三だの、成人式だの、結婚式だの、入社式だのという儀礼があり、一步ずつ成熟をかさねていく。人は、こうした儀礼をへて、身体だけではなく、魂のレベルでも、成熟していくのである。

日本の伝統社会にも、人生の節目には仕来りや儀式があつたが、韓国の場合には、それが一層やかましかつたのかもしれない。たとえば、幼児が少年になれぬまま命をおとしたり、青年や乙女が結婚して子供をなさぬままに他界したりすると、その魂は未成熟のまま、一人前の祭祀をうけることがきかない。だから、両親はなんとか死者に相応しい相手をみつけて死後の結婚式をあげようとする試みる。

村山智順は、数かぎりない神、鬼、精霊、魔をあげ、鬼神に言及しているが、なかに「孫閣氏」という鬼神をあげている。

「年齒妙齡に達し未だ春を解せずして世を辞したる処女の魂が、悶々の情に堪えずして遂に悪鬼となり、代代其家に崇り併せて他人の処女を害するもの、又一説には処女のみを取憑く出齒式の悪鬼なりとの二説あれども確たる事は不明。鮮人は最も之を怖れ巫女は之を金儲の材料に使う、若し処女が病に罹れば直に巫女をして孫閣氏の崇りなりや否やを問わしめ、然りと云うときは祈禱を依頼し種種の供物をして巫女は鐘鼓を打ち賽舞す、而して孫閣氏が衣類に乗り移る様に其処女の衣服全部を屋内の空室に積み重ね昼夜祈禱を続行

する、それにもかかわらず其処女病死せば之を埋葬する時には男子の衣服を着せ頭を下に足を上に倒して墓穴に葬り其上に沢山の刺のある木の枝を棺の周囲に埋める。或は道路の四達の十字交差点下に密かに埋却し、せめてもと多数の男子に其上を踏ましめ、艶情を満足せしめ悪魔の出て来ぬ様にする。」(村山智順・前掲書参照)

死者の魂を手厚く葬り、儀礼を絶やさぬ人々のあいだに、このような民俗が残ることは驚きだが、ついこの間までは、よく聞かれた話である。孫閣氏のたたりで死んだ処女は、自らも孫閣氏に変異するので、四辻に葬って閉じ込め、踏みしめることで、魂を清めなければならぬのである。通常の埋葬や祭祀は、一切行われぬ。

こうした話を聞けば、かつて航空機事故で死んだ未婚の男女の両親が語り合っていて、死後に彼らを娶わせたことも、よく理解できる。

人は、人生の節目ごとに、儀礼をへて、成熟していくのであり、成熟し、一人前の子孫をもたぬ魂はなんらかの恨みを残し、シャーマンによる特別な儀礼によらなければ救われない。そしてさらに言えば、死者もまた、生者とおなじく、死後の儀礼をへて死者の魂を成熟させていく。

日本の死者が、初七日や四十九日、一周忌、三周忌などをへて次第にあの世に旅立つように、韓国の死者も細かい手順をへてあの世に旅立つ、とくに五代以上の祖先となれば、完全に家を離れて山の墓に安住する。しかし、問題はこのような手厚い儀礼を受けられず、魂を成熟させ、山の墓におさまることのできない霊である。これが悪霊となり、この世をさまよって、生きているものを煩わせるのである。とくに近代的な医療の整備されることのない時代には、疱瘡、コレラ、マラリアから出産にともなう病、はてまた精神の病まで、すべては悪霊のせいとされたが、治療といったら漢方のほかは、シャーマンの祈禱や護符くらいしかなかったのである。

4 気まぐれな祖霊

説話や伝承から気づく二つめのことは、霊が両義的な存在であり、守護霊はいつでも悪霊に変化する可能性をもつということである。死者は、死後の通過儀礼をへて、一歩ずつ成熟した守護霊になっていくのだが、その過程で誤りをおかせば、いつでも祟りをなす。

子孫の無実の罪を訴えた金庚信や、『慵斎叢話』の墓を暴かれた死者の怒りは、こうした両義性を示すよい例である。

『朝鮮の鬼神』には、鬼神とともに上は玉皇上帝や仙女から、下は水鬼や痘神にいたるまで、ありとあらゆる民間の神々が紹介されているが、これらの多くは、一方的に悪いだけのものではなく、祀り方によって善くも悪くもなる。家には業神、基主、竈王などの守護神がいて、主婦がその祭祀にかかわっているが、これも主婦の祀り方しだいでは家を傾けることにもなるのだから、怖ろしいカミであるといえよう。

たとえば業神は、家の幸せにかかわるカミで蛇や蝦蟇をその使いとする。だから蛇や蝦蟇が家から去っていくのを見ると、主婦はあわてて呼び戻す唱えごとをするのが常であった。このカミは、家にいてくれれば幸をもたらす、出て行けば不幸が起こる。

このようにすべての霊的存在は両義的なものであって、善くも悪くもなる。オニと神とは切り離しがたく、すべての霊が鬼神なのである。

5 トケビとともに生きる

最後に、人間以外のモノの霊が、悪霊と化す場合について、考えてみよう。これもまた鬼神の仲間なのである。まず崔仁鶴が、忠清南道青陽郡で聞いた話を要約する。

「ある日、ひとりの若者が、市に出かけた帰りに、夜遅く大きな巨人のような大男に出会った。大男は若者に『久しぶりだから角力をとろう』という。若者は、見たこともない相手と角力をとる気はないと断るのだが、どうしてもと迫られる。若者は、やむをえず相手をするが、なにしろ大男なのでかわない。組み伏せられて下敷きになった若者は『これで負けたら死ぬかもしれん』と思って、力のかぎり角力をつづけた。そして数時間の後、疲れの見た大男を投げたおし、立ち上がることもできないほどにやつつけた。



語り手から話を聞く崔仁鶴氏

村に帰った若者は、友達を呼び集め『わしは巨人をやっつけた』と大声でどなった。友達は信じないので、いって確かめようということになって、松明をもって引き返してみると、大男の跡形もなく、ただ竹の根元に古くなって使えなくなった穀竿がひとつ残されていて、穀竿の穴には小さな棒が差し込まれていた。若者は、古い穀竿が化けたトケビと角力をとっていたのだった。」(崔仁鶴・前掲書参照)

崔仁鶴によれば、このタイプの話は韓国全域に分布し、どこでも聞くことができる。トケビの正体としては穀竿のほかに、古い箒、火搔き棒、杵などがあり、他にも女の経血のついた棒や布も変化するというが、ほとんどが民具であり、長年にわたって人が使用したものが精をえて、化生するのだという。(崔仁鶴「韓国のトケビと日本の化物」『日本昔話大成研究編』1979年所収・参照)

崔仁鶴はまた、もう一つのタイプの話を紹介している。やはり忠清南道青陽郡の話である。これは姿の见えないトケビの話である。

「むかし忠清南道青陽郡の長谷里に朴進士宅があった。ある日の晩、夜中にいきなり台所から器がこわれる音がしたかと思うと、床間の板をカンカンたたく音がした。また馬の走る足音、壺のわれる音などがする。起きて確かめようとしても何も見えない。このような音が何日もつづいて聞こえたので、主婦は火の入った青銅の火鉢を用意して、庭のまんなかに置いた。そして何か唱えながら祈った。すると怪音はぴたりと止んで、それからは二度と騒ぎは起こらなかった。ところが、しばらくして主婦は原因不明の病で死に、嫁も間もなく死に、朴進士宅は廃屋になってしまった。これはトケビのしわざであると、村人は噂した。」(崔仁鶴・前掲論文参照)

こうした怪音系統の話も全国に分布し、長く人の住まない空き家には、ほぼこのタイプの話がまつわりついているという。だからこのような空き家に住む場合には、必ずトケビ

に祀りをささげ、祈らなければならない。

この話は、さきに紹介した『慵斎叢話』の奇裕の屋敷に起こった異変と酷似している。おそらく同じタイプの話が、ある時はトケビの仕業、ある時は一族の怨霊の仕業として語られたに違いない。怨霊と同じく、トケビもまた祭祀によって清められたのである。

人間の霊と同じく、トケビは両義的な存在であるところも共通している。

同じく崔仁鶴によれば、トケビは、怖れず、気持ちよく迎え入れ接待すれば、富を与える財宝神ともなるのである。全羅北道扶安には、こんな話がある。

「話者が若い頃、雨が降り出すと海辺には蟹がたくさん集まってきた。ある晩、おじと一緒に海辺で蟹をとっていると、どこからともなくチチチという音がした。おじは、それがトケビだという。トケビは、しばらくすると暴れまわり、あたりを汚して、ランプの火も消してしまった。周囲は真っ暗になり、なにも見えなかった。するとおじは『水底の金書房、蟹料理と蕎麦のムックをご馳走するから、もういたずらはやめてくれ』と言った。すると騒音は急に止んで、蟹がいっぱい集まってきたので、思う存分とった。翌日、約束どおりにご馳走を供えると、それからは蟹をたくさんとることができた。」

扶安には、トケビを祀る家もあるという。済州島をはじめ、韓国南海岸一帯の漁村では、トケビを財宝神と同じようにまつり、令監とか参奉などと神の呼称をつけて丁寧呼びかけることもある。トケビは、移り気なので、気をつけないとすぐに悪戯をするのだそうだ。(崔仁鶴・前掲論文参照)

この話は、沖縄のブナガヤやキジムナーの話によく似ているが、韓国の伝承の世界には、日本のように河童や天狗や鬼のようにさまざま種類の妖怪が活躍することはない。化け物はすべてがトケビであって、その正体は不明である。最初に紹介した話のように古い杵や箒が化身したという話は、ゆたかなトケビ伝承のごく一部である。おそらく、その多くは、祀られることなくオニとなった死霊、悪霊、雑鬼とも重なりながら、つい先ごろまで、人々の日常生活のなかで、善や悪をはたらき、いきいきと活躍していたのだと思う。